

田島樹人、これに厚が歌詞をつけ、英国民謡「青い小鳥」、露国民謡「白雪」、瑞国民謡「悲愁」の3曲を収める。原楽譜不明であるが、「曲水」(8-7)の新刊紹介欄に摩山水がこれの紹介文を書いている。

「曲水」(8-6)。批評文「浅い眼で見ても答ふ」(5月12日記)。季題寸言の選後評ならびに南涯との論争。

7月・「令女界」(2-7)に、抒情小曲「ときめき」(33頁写真)が載る。この詩に小田島樹人が曲をつけ、同号の附録となっている。

「曲水」(8-7)。季題寸言3章、及び前号に続く「寸言」をめぐる南涯との論争。

8月・「令女界」(2-8)

に抒情小曲「白き手」(2-9)(写真下)に「夜愁」が載る。

いずれも厚の筆名である。

12日・満27歳。

9月・関東大震災。病父と共にあった下目黒の寓居は壁土がおちる位で、事なきを得た。当日の事は「令女界」(2-11)震災記念号所載の詩

「藤椅子にて」、記録「地しん

には一向平気な僕も」及び大

正12年10月9日付と大正13年8月24日付の鈴木三千代宛書信に委しい。

13日・横浜に父方の伯母井上安子一家の安否をたずねる。



10月9日付三千代宛書簡。

同日付脱稿の抒情小曲「悲しき冬」は、「令女界」(2-12)に掲載。

11月・「曲水」(11月改巻号9-1)に、季題寸言2章を寄せ

る。  
12月・上京の渡邊水巴に会う。(震災後「曲水」は大阪で発行され、水巴も大阪府下豊中村に在った)

8日・随筆「あの頃のこと」(1)(2)を脱稿。

9日夜、バラックの鴨水居で、13日夜、雨漏りの水巴庵で、他の俳誌最近号の俳句合評会がひらかれて、出席。

吟社師走句会、上野花山亭、参会。

「曲水」(9-2)、季題寸言の選及び1章。「誰れ彼れ曰」に2編。

23日・帝国ホテル演芸場、藤蔭会舞踊公演の切符をおくられ、藤蔭静枝振付の「露地の細路」を観る。この折の所感を神戸の三千代宛に書き送っているが、厚一の童謡観、世相観が見られる。(大正13年1月3日付書簡)

なお、この年の作品としておいたものに、本居長世が曲をつけた童謡「信号燈」がある。本居が長く住んだ目黒不動尊西側の家は厚の住居からも近距離にあるが、交友関係を示す資料はない。

▽大正13年(1924)

元旦・父と亮之助と3人、蛤の吸物で屠蘇を祝う。午後小田島樹人来訪。(3日付鈴木三千代宛書簡)

青木幸太郎宛賀状に1句。